

平成26年度

大阪大学

文学研究科・文学部 インターンシップ報告書

編集・発行

大阪大学 文学研究科・文学部

教育支援室

560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5

平成27年7月

目次

はじめに……………教育支援室インターンシップ専門委員	片山 剛 (文学研究科教授)	1
1 音楽関係		
1.0 音楽関係インターンシップ概要 ……………	文学研究科教授 伊東 信宏	2
1.1 インターンシップ生受け入れに関するコメント ……………あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール 企画事業チーフマネジャー 谷本 裕		3
1.2 あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール インターンシップ報告 ……………文学研究科博士前期課程1年(音楽学) 松井 拓史		5
1.3 京都コンサートホール インターンシップ報告 ……………文学部3回生(音楽学) 田上 和貴		9
2 演劇関係		
2.0 演劇学演習「劇場制作演習」……………	文学研究科教授 永田 靖	13
2.1 兵庫県立尼崎青少年文化創造劇場(ピッコロシアター) インターンシップ報告 ……………文学研究科博士前期課程1年 上島 万理恵		15
2.2 兵庫県立尼崎青少年文化創造劇場(ピッコロシアター) インターンシップ報告 ……………文学部演劇学専修4回生 川井 秋穂		21
2.3 兵庫県立尼崎青少年文化創造劇場(ピッコロシアター) インターンシップ報告 ……………文学部演劇学専修3回生 岡田 尚子		27

はじめに

本報告書は、平成 26 年度に大阪大学大学院文学研究科および文学部において行われたインターンシップ、ならびにその準備や事後指導を行っている授業について報告したものです。企業が募集し、学生が応募して参加するという形で行われる、授業とは関係のない「インターンシップ」は、近年、増加の一途をたどっていると思われます。本報告書は、授業とは別に開講されるこうした企業主導のものではなく、あくまで文学研究科・文学部の教員が働きかけて調整し、授業の一部として実施しているインターンシップの報告をとりまとめたものです。

以下に、平成 26 年度における実習先、人数、期間を概観しておきます。なお、平成 26 年度には、美術・映画のインターンシップに参加した学生はおりませんでした。

音楽関係

○いずみホール	学部生 1 人	5 日間
○あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール	大学院生 1 人	5 日間
○京都コンサートホール	学部生 1 人	5 日間

演劇関係

○兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）	大学院生 1 人	学部生 2 人	4 日間
--------------------------	----------	---------	------

報告書を読みますと、例年と同じですが、インターンシップに参加した学生にとって、実習先での体験がかけがえのないものであったことが読み取れます。とりわけ、1.2 松井拓史くんの報告書に書かれている「感想」に対して、実習先〈あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール〉の谷本裕さまが、1.1 のコメントで正面から反応されているのは、このようなインターンシップを続けていくことの意味や意義を改めて考えさせてくれます。他の方々の文章を含め、味読をお願いする次第です。

現在、実習先は芸術関係の諸施設に、また指導教員や学生も特定の専門分野・専修に限られています。インターンシップに対する取り組みは、本研究科・学部の中期目標・中期計画に明記されてきた事項でもあり、今後も着実に推進していく必要があると思われます。

最後に、大学側の希望を真摯に受けとめていただき、さまざまなお手数とご迷惑をおかけしているにもかかわらず、積極的に学生たちを迎えて指導して下さっている受け入れ諸機関の皆様、この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

教育支援室インターンシップ専門委員 片山 剛（文学研究科教授）

1 音楽関係

1.0 音楽関係インターンシップ概要

文学研究科教授 伊東 信宏

平成26年度の音楽に関するインターンシップも、引き続きいずみホール、ザ・フェニックスホール、京都コンサートホールの3館に受け入れを承諾していただき、3名の学生、院生について実施した。これは、2学期開講の「音楽学演習」受講生、および音楽学専攻の院生から希望者を募ったものである。例年どおり、以下にはザ・フェニックスホール、および京都コンサートホールでのインターンシップについてのみ、受講生からの報告を掲載する。

内容については、以下の報告をご覧くださいととして、ここではインターンシップ全体の経緯を時系列に即して書き留めておく。

- ◆ 4月「音楽学演習」（1学期）の開講に伴い、インターンシップの受講者を募集。今回は2名の希望者があり、もう一枠については大学院生から希望者を募った。その後、研修先を決定した。
- ◆ 10月14日（火）～10月17日（金）、および20日（月）の5日間、いずみホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 11月5日（水）～11月9日（日）の5日間、京都コンサートホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 11月17日（月）～11月21日（金）の5日間、ザ・フェニックスホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 2014年12月9日（火）、上記3つのインターンシップについて、音楽学研究室の演習において、受講者3名が報告。

いつも感じることだが、学部学生は2回生で初めて研究室に姿を見せるようになる頃と、4回生で卒業する頃とでは、印象が大きく変わる。一言でいえば成長する。だが、その成長は、どうも大学での勉強の成果というよりも、就職活動などによって社会と接触することで、自分にとってのびきならない要求や条件を突きつけられることに依るところが大きいように思われる。その意味では、このインターンシップも、短い期間ではあるが、学生たちにとって大きな経験になっており、これまですでに10年以上続けてきた理由も、そのような手応えがあったからである。ただそのような手応えや感触は、この数年、多少変わりつつあり、全体の実施方法については、そろそろ見直しを考え始めた方が良いのかもしれない、とも感じている。

ともかく今回も、受け入れていただいていたホールのスタッフの方々には、本当にお世話になりました。心からお礼を申し上げます。

1.1 インターンシップ生受け入れに関するコメント

あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール
企画事業チーフマネジャー 谷本 裕

2014 年秋も例年通り、私たちホールは大阪大学の学生さんをインターンシップ生として受け入れた。「例年通り」と書いた通り、この受け入れはもはや、全く、すっかり恒例になっている。指導教官の伊東先生の言によると、この活動は既に 10 年を経過している。「恒例」という言葉に私は「安心」・「安定」といった穏やかな、敢えて言えば肯定的なコンテキストの一方で、それらと裏腹な「型」「繰り返し」、あるいは「怠惰」といった否定的なイメージを同時に感じてしまう。この 10 年のインターンシップについて私はまず、大学の中の知的体系とは異なる、ある種の知的営み（を含む活動）を学外で、実践に携わる者が示すという点において、少なからぬ価値を持つ、と位置付けた上で、さらに考えてみたいことがある。

インターンシップで来られる学生さんは当然というべきか、毎回、違う。同一人物ではないのだ。いつもいつもいつも、初対面の学生さんに、私たちは音楽ホールの仕事の実情を説明し、有るべき姿（理想像）も少しく提示し、ちょっとした就業体験も提供する。この営みが学校教育を補う、社会教育としての側面を持っていると仮定するなら、あらゆる教育活動が油断すると陥りがちな、同一事項の反復になってしまう恐れが、私たちにもある、と実は内心、懸念している。それでも受け手である学生諸君には一度限りの体験であるだろうから、「新たな見聞を広げる」という意味で、それなりの価値があることはやはり間違いないだろう。それは確かにそうに違いない。けれどもー。

昔の旧制高校などには、何年も前の講義ノートを毎年、まさに 10 年一日のごとく読み上げ授業をする教師が居たそうだ。いや、ひょっとしたら今の大学などにだって、それに類する教官が居ないとも限らない（ただ、今の学生は黙ってはいないだろうが）。どんな教科にせよ、教えるべき基本的事項は確かにあるだろうから、無論それだって、あながち悪いこととは言えない。ただ大海に深海と表層があるがごとく、ベーシックな、静的な堅固な部分と、ビビッドで動的な流動的部分との一定の均衡が、教育活動にもあって然るべきだろう。時には基礎的部分が鳴動する変化が、海には訪れることがあることを現代人は知っている。そう考えると、私たちのインターンシップは一体どこまで、そうした動的な部分を提示できているのだろうか。

今回のインターンシップ生・松井拓史さんの報告、とりわけその「感想」はその意味で、私たちの静的な部分を刺激する「毒」を持っている。私にとって息子のような、彼ら若い世代にとってのコンサートホールというシステムの「ウザったさ」が、紳士的なオブラートに包まれて描かれているように思われる。そうなのだ。この 10 年の間、世の中は大きく変化した。しかもその度合の大きさは、これまで出会ったことがないような、かなり大きなもの、社会生活全般

に及ぶ質的なものだ。そうした変化の時代を生きる彼らにとって、(ひとり私たち施設に限らず) ホールという仕組み自体はあまりにも、変化に対し自若に過ぎるよう感じられるのかもしれない。彼ら見習い (intern) の視点から私たちは自分たちを見、或る動的变化を構想することが、この制度を「恒例」にしない要諦でないか。伊東先生のおっしゃる「見直し」のヒントも、そうした相互作用の効能をどう捉え、制度化していくか。少し時間を取って検討する中でこそ、生まれ出る可能性があるように思われるのだが、どうだろう。

(了)

1.2 あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学研究科博士前期課程1年（音楽学） 松井 拓史

1. 概要

日時：平成26年11月17～21日（月～金）

午前9時～午後5時（最終日のみ午後10時まで）

場所：あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール

2. 活動報告

《第1日目 ホールの概要・実態》

インターンシップ初日。まず職員さんたちと顔合わせをし、その後、支配人の吉元さんから、ホールの概要についてのレクチャー。ザ・フェニックスホールの運営、特に財務状況などについて説明を受けた。また、本社から出向してくる職員と、ホールのベテランスタッフとの間で、ホールのあり方や運営に関する考え方が微妙に違うことがあるため、その調整が必要になるという話を聞いた。また、ホール運営の将来的な問題についてもお話された。午後からは、まず三井さんと一緒に、ホールがどのような造りになっているのか見て回った。その後の谷本さんによるレクチャーでは、自主企画公演と公演広報についてお話を聞いた。メセナ活動、つまり企業や政府が公金を使って芸術文化を支援する活動の根拠として、それまでになかった芸術的価値を創造する「イノベーション説」や、地域における企業のアイデンティティを高める「威信説」などがあるが、いかにしてそれらのバランスをとっていくか、ホールとしての方向性を考える必要がある。また、自主企画公演がホールの独自性を打ち出すために重要であるとのことだった。

《第2日目 広報活動について》

朝、まずはホール機関紙「サロン」の発送作業を行った。封筒に宛名シールを貼るのだが、発送先はおおよそ1,300ほどで、これを毎回手作業で行っている。途中、吉元さんのはからいで、「エヴォリューション・シリーズ」の打ち合わせを見学させていただいた。午後は、崔さん・岡本さんのお二人から、ホームページと「サロン」について、それぞれお話を伺った。その後、三井さんより貸館事業についての説明。自主公演とは異なり貸館公演は実質的に利益が発生するため、貸館公演を増やせばそれだけ黒字になるのだが、そもそもメセナ活動は儲けを出すための事業ではないので、自主公演と貸館公演をどれくらいやっていくかということに関する調整も必要である。

《第3日目 公演準備について》

午前中はまず、吉元さんと1時間弱お話をした。「プロフェッショナルを作らず、全員が同じ

仕事を同じようにこなせること」が基本的なサラリーマンの考え方なのだが、そういう世界からすると、ザ・フェニックスホールの運営、つまり、それぞれが専門の仕事を持っているという状態が、少し危なっかしく感じられるそう。その後、2 日後に迫った今井信子さんの公演で配布するチラシの挟み込み作業を行った。これもかなりの量で、黙々と作業を行った。午後から、まずは大前さんによるチケット管理に関するレクチャーがあり、実際に何か公演を行うという設定でシミュレーションを行い、公演の主催者が何を考えていかなければいけないかということ聞いた。特に注意しなければならないのが票券管理の問題である（年に1~2 回ほど、主催者のずさんなチケット管理を原因とする「あふれ公演」が発生するそうで、そのような場合、チケットを購入したにも関わらず入場できなかったお客様の怒りの矛先が、最終的にザ・フェニックスホールへと向けられてしまうため、貸館公演と言えど、ホール側もある程度気にかけておかなければならない）。その後、今井さんの公演に関する全体会議が行われたが、非常に淡々とした進行で、皆さんが事前にきっちり仕事を把握しておられる印象だった。その後、著作権や友の会の組織・運営に関するお話を平松さんから伺った。

《第4日目 広報活動、貸館受付について》

インターンシップも残り2 日となった。午前中は、平松さんから公演広報についての説明を受けた。自主公演の際にはおよそ6 ヶ月前から広報活動を開始し、できる限りのことをやって本番を迎える、とのことであった。午後は、まず榎野さんから貸館公演の受付に関するお話を聞いた。予約受付から打ち合わせまでの流れと、打ち合わせの際にどのようなことを主催者側と確認するかという内容。チケット管理と同じく、打ち合わせできちんと確認しておかないと、例えば、本番で突然ピアノの内部奏法をしたりといった事態になる場合もあり、結果的にホール側に損害が出てしまう可能性があるため、出演者との打ち合わせは非常に大切である。また、すべての公演情報は日誌に記録されており、過去に貸し出しをしたことのある方から再び貸館公演の依頼が来た場合に、貸出許可の判断基準の1 つともなっている。その後は、2 日目に行った「サロン」発送作業の続きを職員さんたちと一緒に行ったが、すべて終わらせることができなかった。その後、翌日の今井さん公演の出演者3 人と顔合わせをし、1 時間ほどリハーサル見学をさせていただいた。

《第5日目 公演準備・お手伝い》

自主企画公演当日ということで、朝から設営などのお手伝いをした。ビル1 階のロビーで、受付やレセプションの方が使うスペースを作ったり、ホール外の休憩スペースに間仕切りを設置して舞台袖となるスペースを作ったり、出演者の控室のアメニティを揃えたりといった、通常の流れを職員さんと一緒に行った。午前中ですべての作業が終わってしまったので、午後からは「サロン」の発送作業の続きを行った。その日中に発送しなければいけなかったのに、職員さんたちと一緒に急いで終えた。その後は谷本さんのレクチャーがあり、まずは広報活動の種類と特徴に関してお話を聞いた。チラシや新聞、ホームページなど、広報活動にはいくつ

か方法があるが、それらは大きく2種類に分けることができる。すなわち、出稿者（ホール関係者、演奏者等）から代理店を介して媒体へと掲載されるタイプと、新聞記者などが執筆するタイプである。宣伝方法によって、イベントに対する執筆者の思い入れや、宣伝の費用などが異なる。また、どのような層に向けて宣伝を行うのかによって文体を変えることも必要で、そういう感覚こそが、文学部／文学研究科という場所で音楽を研究している者にとっても必要不可欠なものである。

3. 感想

ホールのスタッフさんと話していると、「最近、若い人がホールに足を運ばなくなっているのだけど、そういう状況を改善するいい方法はないですかね?」という問いかけをされることが多かった。現状として、このホールの会員の半数以上が65歳以上の高齢者であり、公演時に客席を見回した際も確かに年齢層は高かったのだが、この事態についてホールの方と話し合ってみると、主に2つの理由が挙げられた。まずは「時間とお金に余裕がないから」という理由で、既にホール側はこれを考慮し、自主公演に関しては格安の学生席を設けたり、一般的な終業時刻に合わせて開演時間を設定したりしているのだが、あまり効果はないとのこと。次に考えられるのが、「若い人はクラシック音楽を聴かない」という理由。これに関しては、クラシック音楽以外の公演（ポピュラー音楽、お笑いライブ、ファッションショー等）を増やしてはどうかという議論も出ているようだが、ホールが主眼にしているコンテンツとは異なるという意見もあり、調整は難航しているようである。また、音楽がデータ化され、好きな音楽をどこでも安価で入手・聴取できるようになったことが、レコード産業や演奏会ビジネスといった音楽業界の衰退を招いているという一般的な説明もできるだろう。

しかしそうして考えるうちに、私は、もっと本質的な問題があるような気がしてきた。それは「音楽の聴き方」に関する問題とも言える。例えば「お小遣いを貯めてやっと手に入れたLPを擦り切れるまで聴いた」とか、「どうしても聴きたい曲を聴くために、高いチケットを買って遠方の演奏会を聴きに行った」といった音楽的体験（音楽そのものを追い求める感覚、と言えるかもしれない）は、欲しささえすればほとんど全ての音楽を手に入れられる環境で育った私たちにとって、ほとんど無縁なものとなってしまった。アルバムからお気に入りの曲を選んでダウンロードし、通勤途中やスポーツジムで聴く。聴きたい曲があればYouTubeで検索し、お目当ての箇所まで早送りする。そういった聴き方に慣れてしまった私たちにとって、コンサートホールの利点として語られる「演奏家を目の前にした生演奏の良さを味わえる」だとか、「音楽そのものに集中できる環境」といったことはあまり意味がなくて、もっと言えば、煩わしいものでさえあるかもしれない（そこではお気に入りの曲だけを聴くことはできないし、早送りもできないのだから）。今のような、音楽を聴く際に「気軽さ」や「扱いやすさ」がもてはやされる環境にいると、私たちはまるで音楽を手にとって自由に支配しているかのような感覚にもなるのだが、そのような状況に当てはめてみると、コンサートホールというのは人々の音楽に対する支配欲求を阻害するもので、ひどければ欲求不満すら引き起こしてしまうのではないか、

とまで勘ぐってしまう。

しかし、考えてみてほしい。果たして音楽とは、人の手の中に収まる程度のものだったろうか。何か音楽を聴いていて堪えきれず泣いてしまったとか、ぞっとするほど嫌な気持ちになったとかいうことは、きっと多くの人を経験しているはずだし、もっと言えば、音楽を聴いてそれまでの考え方をひっくり返されるような思いをしたり、時にはこれからの人生に影響することだってある。私たちは、音楽には人の手に負えない「力」のようなものがあると身をもって知っているはずなのに、多くの人があることをすっかり忘れてしまっているように感じられる。いま私たちに必要なのは、そういう感覚をもう一度思い出し、「音楽を聴く」ことの可能性について考えることである。音楽学という分野に必要とされているのは、そのきっかけを提供していくことだろうと、私は思う。

1.3 京都コンサートホール インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部3回生(音楽学) 田上 和貴

【研修先】

京都コンサートホール

【研修期間】

2014年11月5日(水)～11月9日(日)

【研修内容概略】

第一日目 11月5日(水) 13:15～22:00

主催公演 「ローマ・サンタ・チェチーリア国立管弦楽団」

- ① チラシ挟み込み
- ② 物品販売

第二日目 11月6日(木) 8:30～17:15

- ① コンサートガイド校正
- ② ホール下見同行

第三日目 11月7日(金) 8:30～17:15

- ① 事業企画について
- ② 大ホール見学・試奏

第四日目 11月8日(土) 8:30～17:15

主催公演 「室内オーケストラへの招待 vol.4」

- ① 舞台業務
- ② 物品販売

第五日目 11月9日(日) 8:30～17:15

- ① ホームページ作成事業
- ② レセプション業務

【施設概要】

京都コンサートホールは、1995年に完成した京都最大級のクラシック専用のコンサートホールである。指定管理者制度により、2006年から公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団が管理運営を行っている。京都市交響楽団の本拠地でもある。

・コンサートホール（大ホール）

客席数 1839 席。シューボックス型。総ストップ数 90、パイプ総数 7155 本のパイプオルガンが設置されている。

・アンサンブルホール ムラタ（小ホール）

客席数 514 席。アンサンブルやリサイタル、小編成のオーケストラの演奏に使用される。

【物品販売】

11 月 5 日にコンサートホール（大ホール）にて行われた「ローマ・サンタ・チェチーリア国立管弦楽団」においてプログラムの引き換え・販売を行った。特別会員のお客様にはプログラムを配布し、一般のお客様には 1000 円で販売した。

・公演概要

公演名／「ローマ・サンタ・チェチーリア国立管弦楽団」

曲目／ヴェルディ：ルイザ・ミラー

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲

ブラームス：交響曲第 2 番

指揮者／アントニオ・パッパーノ

チェロ独奏／マリオ・ブルネロ

「京都の秋 音楽祭」のプログラム。「京都の秋 音楽祭」は国内外の著名な演奏家や京都にゆかりのある演奏家が出演する多彩な演奏会を開催するイベントである。今年は 9 月 14 日から 11 月 30 日まで開催しており、自主企画はこの期間に集中しやすい。

本公演は「京都の秋 音楽祭」のなかでも目玉企画である三つの海外名門オーケストラ（モントリオール交響楽団、ローマ・サンタ・チェチーリア国立管弦楽団、バイエルン放送交響楽団）の来日公演のうちの一つである。

【事業企画について】

11 月 7 日に事業企画課の方から事業企画や運営についてお話を伺った。

今回お話を伺い、企画を考えるうえで一番悩みの種になるのはやはり予算なのだろうと感じた。限られた予算の中でできるだけ良質の企画を提供する苦心が感じられた。また、大ホールと小ホールの公演数やプログラムの時代区分などのバランスを保つことも意識しているとのことであった。「京都の秋 音楽祭」のような京都コンサートホールならではの企画をさらに広く発信していき、企画内容を見えるように心がけているのだという。またそうした姿勢は他の近畿圏のコンサートホールとの差別化を図るためにも重要とのことだった。公共ホールとして地

域とつながることも大切にしており、地域住民が参加できるような企画も考案している。例えば、「音楽でつながる♪リレーコンサート」という出演者を一般公募する企画を行っている。また、邦楽の公演も増やしていきたいとのことだった。

【大ホール演奏体験】

11月5日から7日までの三日間は京都市立藤森中学校から職業体験で中学生が来ていて、彼らと一緒に業務体験をする機会が何度かあった。そして彼らの体験の最終日に当たる11月7日にせっかくなので一緒にホールで演奏してみようかというご提案をいただき、簡単なアンサンブルの曲を演奏する機会をいただいた。大学生が中学生に交じって演奏するなんとも大人気ない光景であったが、音響の優れたホールをほぼ貸し切りの状態で利用させていただき、自分にとっても中学生にとっても貴重な経験であったと思う。

【舞台業務】

11月8日に小ホールで行われた「室内オーケストラへの招待 vol.4」において、舞台業務の見学・体験をさせていただいた。はじめに椅子・譜面台などのセッティングを行った。

室内オーケストラの演奏会ではあったが、ハープ二台とチェレスタを含むプログラムであったためセッティングは予想よりも大がかりなものだった。そうした状況でもステージマネージャーを中心に丁寧かつスピーディに設営を行う裏方スタッフの姿は印象に残っている。また、ステージマネージャーは演奏者から様々な相談をされることがある。例えば、空調の風向きを変えてほしいといったものや照明を弱めてほしいといったものである。今回の公演でもゲネプロの合間の休憩にそうした依頼があった。その際ステージマネージャーは照明係などの他の担当者と連携して演奏者のニーズに応える。演奏者が集中して演奏できる環境を提供する大切な仕事なのだと感じた。

・公演概要

公演名／「室内オーケストラへの招待 vol4」

曲目／ラヴェル：組曲「マ・メール・ロワ」

ドビュッシー：牧神の午後への前奏曲

サティ（ドビュッシー編）：ジムノペディ第1番、第3番

ストラヴィンスキー：バレエ組曲「プルチネルラ」

指揮者／大友直人

演奏／京都市交響楽団

アンサンブルホールムラタ（小ホール）で室内オーケストラの響きを味わうシリーズの第4回目。今回は「20世紀初頭のパリ、夢を追いかけた男たち」というコンセプトに基づいたプログラム構成。本公演も「京都の秋 音楽祭」の演奏会の一つである。開演30分前にホワイエに

て京響ヴィオラ・セクションによるウェルカム演奏が催された。これは3月30日に行われる京響ヴィオラ・セクションによる公演の宣伝の目的も兼ねたもので、演奏後すぐにチケットの販売がブースにて行われた。

【レセプション業務】

11月9日に大ホールで行われた「京都府警察音楽隊第24回定期演奏会」において、レセプション業務を体験させていただいた。はじめに開場後にプログラムの配布を体験した。この公演の予定入場者数は1500人と多く、お客様にスムーズかつ丁寧にプログラムを配布することは難しく感じた。開演中、レセプションはホール入口、ホワイエ、各ドア前、クロークなど定位置につき、インカムで連携をとりつつ、それぞれの業務をこなす。今回はサブチーフに同行してホワイエで業務を見学し、お話を伺った。レセプションという仕事で最も基本的なことは、ドアを守ることらしい。つまり、演奏の妨げとならないよう、演奏中の人の出入りを管理するということだ。今回の公演はお客様の出入りは自由であったが、ドアを守るという姿勢はしっかりと感じられた。また、お客様とのトラブルを避けるための対応も工夫されていて、お客様の行動がトラブルにつながると予想される場合は先に一言声をかけておくそうだ。丁寧な対応だけでなく、時にはしたたかな対応も求められるのだろうと感じた。

【所感】

今回のインターンシップを通じて、公共ホールがどのような運営を行いどのように地域や音楽と関わっているか知ることができ、大変貴重な経験になった。事務・企画・裏方・表方と様々な業務を体験させていただき、演奏会はそれぞれの業務担当者の連携と綿密な計画の上で成り立っているのだと感じた。コンサートホール運営の実際を垣間見ることができたのではないかなと思う。今後は今回の経験を大いに活用していきたい。

2 演劇関係

2.0 演劇学演習「劇場制作演習」

文学研究科教授 永田 靖

研修の概要

平成26年度演劇学研究室では、兵庫県立尼崎青少年文化創造劇場(ピッコロ劇場)において、劇場制作の研修を行った。研修期間は10月1日～4日までの4日間である。研修する上演は、ピッコロ劇団第50回公演秋元松代作藤原新平演出『かさぶた式部考』である。研修に参加した学生は3名である。以下に簡単に概略を示し、研修に参加した学生の報告書を掲載する。

1 目的

「劇場制作演習」では、公立劇場の上演に参加することで、上演芸術がどのように舞台化されていくか、そのプロセスを実習する。そこでは多くの舞台裏での作業を土台としており、俳優の練習のみならず、スタッフや劇場制作部の仕事も数多く関わる。研修では劇団制作部の仕事に参加することでその具体的な仕事を体験的に行いながら、初日まで(今回は2日目まで)の数日を劇団とともに過ごす。それらの過程で以下の諸点を学ぶ。①どのようなプロセスで演劇作品が初日を迎えるか。②(事前に学習しておいた)作品がどのように現実的に解釈され、物理的な諸条件(俳優の個性、劇場の規模、予算規模など)によってどのように細部が決まってしまうか。③稽古最終日(ゲネプロ)と初日の本質的な違いは何か。④観客は作品をどのように受け取っていたか。⑤ピッコロ劇場は演劇作品をどのようなものと考え、どのようなものとして観客に提供しようとしているか。

これらのことを体験的に学ぶことで、ピッコロ劇場が地域社会にとってどのような働きをしているかを考察し、同時に広く演劇一般と劇場の持つ今日的な意義と課題について理解とビジョンを持つことを目的としている。

2 授業の進め方

今回の作品秋元松代作『かさぶた式部考』について、まず1学期科目「演劇学演習」(担当永田靖)でも一回の授業をこの作品に当て、作家と作品内容について詳細な分析と解釈を行った。その後、実際に研修に入る前に、授業担当者(永田)による事前オリエンテーションを大学において行った。オリエンテーションでは、ピッコロ劇場の創設の趣旨、特色、現在の活動状況について簡単に説明した上で、今回の作品と原作者、演出家、劇団の特徴を解説した。同時にインターンシップについての必要な心構えについて述べ、授業の狙いと何を主題として研修を受けるべきかを説明した。

実際に4日間の研修を受ける。研修の最終日(公演2日目)には、演劇学演習受講者(専修学生全員)が観劇する。普段、教室で同じ立場にいる学生たちが、初日には、それぞれ制作者(受付、チケットもぎり、場内案内者など)と観客という異なる立場に立つことで、演劇公演という「出来事性」についてその一回性、約束性、社交性について認識を深めた。また劇場の

概要、作品の特徴、劇団の方向性などを踏まえた上で、制作者の立場から見た演劇上演と、観客の立場から見た演劇上演との違いについて、考察を深めた。

最終的に、インターンシップ参加者全員はインターンについての報告書を、それ以外の観劇者（学生）は観劇レポートを執筆した。授業担当者（永田）はそれらによって成績評価を行い、インターンシップについての報告書は完成した後に、劇場側に提供し、劇場の活動のために役立ててもらおう予定としている。

2.1 兵庫県立尼崎青少年文化創造劇場（ピッコロシアター） インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学研究科博士前期課程1年 上島 万理恵

はじめに

平成26年10月1日から4日までの4日間、兵庫県立青少年創造劇場（ピッコロシアター）でのインターンシップに参加させていただいた。以下に、インターンの日程および概要を記す。

日程と概要

1日目：10月1日（水）

- ・尾西さんにご挨拶
- ・資料室にて、尾西さんより今回の研修概要説明
- ・業務連絡会議見学
- ・資料室にて、井上さんより劇場についてのお話<1-A>
- ・資料室にて、貴田さんより劇団の制作についてのお話<1-B>
- ・資料室にて、中西さんより舞台技術学校についてのお話
→舞台技術学校授業見学<1-C>

内容詳細

<1-A>ピッコロシアターについて

業務部部長の井上さんより、ピッコロシアターの事業概要をうかがう。演劇作品を提供する一方で、貸館として地域の人に使うってもらうことも本劇場の大事な役割であり、その利用率は非常に高い。また、本劇場設立の経緯、いかなる用途をもって建てられたかについてお話くださった。多目的ホールが多く建てられていた時代にあって、目的を演劇に特化して計画されたことが、結果的に現在でも機能性の高い施設として利用されていることに繋がっているのだと分かった。そして、劇場とは建てることだけではなく、管理し、維持し続けていくことこそ難しいのだということに気づかされた。国の助成で成り立っているために、国や地域の人にそのことをよりよく理解してもらうことが課題であるという。

<1-B>劇団の制作について

劇団制作部の貴田さんより、ピッコロ劇団の舞台制作についてのお話。制作部の主な仕事内容は、公演場所の確保・スケジュール調整・制作費の管理である。本劇団が公共劇団であることから、民間劇団の興行形態と比較しながら、分かりやすく説明していただいた。スケジュールとは制作過程での演出家・俳優・美術・音響・照明の日程を調整することである。また、制作費は国からの助成金なので、チケットを低価格で提供できる一方で、地域の人に演劇に触れてもらえるようにすることが必要であるという。そのために、劇場を利用してもらうこと、そして演劇作品に触れてもらう機会となるような公演を定期的に行っていることが分かった。

<1-C> 舞台技術学校について

舞台技術学校主任の中西さんより、学校の概要を説明していただいた。演劇学校・舞台技術学校はどちらも週に二回・夜間開講であるため、学生や社会人にとっても通いやすいものとなっている。実際、その後技術学校を見学させていただいたが、年が違うと思われる生徒たちが役割を分担し、同じように目の前の作業に没頭していた。その日は舞台美術家の加藤登美子さん指導のもと、卒業制作の美術プランのために小さい模型を作っているということであった。生徒たち自身がアイデアを出してそれを形にできるような良い雰囲気だなと感じた。

卒業公演で演出を担当される島守辰明さんが美術プランを考案するために来られ、セットの配置が少しずつ決まっていっていった。そのような過程を見るのは私にとって初めてであったので、舞台のセットしだいでどれだけ見え方が変わるのかということに今後もっと注目してみようと思った。

2日目：10月2日（木）

- ・大ホールロビーにて、劇団公演の準備作業（チラシ挟み込み）に参加<2-A>
- ・資料室にて、三砂さんより劇団概要説明<2-B>
- ・資料室にて、尾西さんより演劇学校についてのお話→演劇学校見学<2-C>

内容詳細

<2-A> チラシの挟み込み作業

2時間ほどに亘るチラシの挟み込み作業に参加させていただいた。まず種類が高く積まれたチラシを一行に並べ、一人ひとりが移動しながら下に下にと挟み込んでいく。完成形はいつも手にしているが、作業は私にとって初めての経験であった。いかに少ない動きでスピーディーに挟み込むかが大切だとお聞きし、自分自身としてもやり方を模索しながら取り組んだ。

<2-B> 劇団概要説明

劇団部部長の三砂さんより劇団の概要について説明していただいた。ピッコロ劇団によって制作される演劇作品は一年の中で春夏秋冬とその時々によって、あらゆる対象に向けて公演されている。例えば、定期的に行われているのが小学生やファミリーを対象としたワークショップ企画である。私自身、小さい頃から母が劇場に連れて行ってくれたことが習慣となり、自然と一人で劇場に足を運ぶようになった。幼い頃の演劇体験が素晴らしいものであったなら、彼らは大人になって自分で劇場へ出向こうとすることだろう。今後も子供たちの演劇との出会いを支え続けていってもらいたいと思った。

現在の劇団員は35名で、役者を地域に根付かせるという標榜通り、創立時からの劇団員を始め、多くがこの地で活動し続けてこられたことを知り、素晴らしいと感じた。また、三砂さんは商業劇団で勤められていたご経験から、商業演劇との違いについて具体的に説明してくださ

った。

その後、「ブロードウェイとハリウッド：その歪な恋愛関係」と題された論文をいただき、ミュージカルが演劇世界と映画世界の影響関係の中で発展していったのだという歴史を知ることができた。私自身、ミュージカルには日頃から大いに興味があるが、そのように演劇と映画が互いをどう思っていたのかという視点に立って考えたことがなかったので、興味深いお話であった。

<2-C>演劇学校について

尾西さんより、演劇学校の概要について説明していただいた。演劇活動が東京一極集中の現在において、関西で芝居を学びたい人たちのために演劇学校が創られ、彼らが活躍する場として、劇団が設立されたということであった。演劇作品が制作される場として、劇団制ではなく、プロデュース制がますます多くなっている中で、劇団が作品を創る意義について考える良い機会となった。また、本劇団はプロの俳優を養成しているわけではなく、あくまで地域文化の向上のために、地域で舞台人を養成することを目的としていることを知っておいてほしいと言われたのが印象的であった。

しかし、公共の劇団である限り、その活動の場を維持していくためにはやはりその地域の人に理解してもらわなければならない。その上で、地域で舞台人を育てることには大いに意義があるはずである。公共の劇団がもっと増えるべきであることは確かだが、なぜ増えないのか。そこには課題も多いことが分かった。また、国が古くから演劇人を育て、演劇を支えている欧米と比較すると、日本にはそのような仕組みがないことについても改めて考えさせられた。

3日目：10月3日（金）

- ・劇団公演『かさぶた式部考』ゲネプロ見学<3-A>
- ・資料室にて、古川さんより広報業務についてのお話<3-B>
- ・劇団公演『かさぶた式部考』初日制作補助（チケットのもぎり、チラシ配布等）
<3-C>

内容詳細

<3-A>ゲネプロ見学

ピッコロ劇団公演『かさぶた式部考』のゲネプロを見学させていただいた。ここで、舞台写真が撮られていた。観客席に制作者が集まり、舞台を見守っている雰囲気というのは、いつも観客として舞台上に在るものしか見ていないときには分からなかったが、その裏側でそれだけの人々が一つの作品を支えているのだということを感じさせるものであった。本来は非公開のゲネプロを観させていただくことができ、貴重な体験となった。

<3-B>広報業務概要説明

古川さんより、広報業務についてお話をうかがった。まず、今回の『かさぶた式部考』の上演時間は2時間40分と長いが、私たちがゲネプロを見学してどう感じたかを尋ねられた。観客にとって、体感時間としてどうであったかを一つの指標にされているということであった。

広報と宣伝は内容が違うことから説明して下さった。広報はメディアによって、作品を客観的に評してもらうものであり、宣伝は制作者側が主体的に広めていくものである。また、やはり本劇場にとって、劇団公演のPRと共に大切なのが、貸館としてホールの存在意義を広く知ってもらうことであるという。

時には作品が稽古に入らずずっと前から広報宣伝活動は始まる。作品によってPRの方法は違っており、今回の『かさぶた式部考』についていえば、社会的・地域的・芸術的になどあらゆる角度からPRしたとのことであった。また、今年の2月に公演され、広報宣伝としては約140日前から始められたという『お家さん』との比較において、そのPRの違いを新聞記事等の資料をいただき、具体的に説明していただいた。そのことから、決して演劇ファンにだけアピールするのではなく、その作品の特性を引き出して、観客を獲得できるよう努められていることが分かった。公演を広く知ってもらうために新聞社の方に記事にしてもらえよう働きかけるわけだが、それはチケット販売状況に応じてであり、残席数が僅かであれば、むしろ広報を止めなければいけないという。そのような考えに至ったことがなかったので、大変興味深かった。

最後に、チケットが売れたからといって、必ずしも演劇作品として優れているというわけではないのではないか、というお話をされ、私自身深く考えさせられた。予想はしていたが、そこには作品としては優れており、観てもらえさえすれば理解されるはずであるという自負に対して、実際チケットは思うように売れないといったジレンマがあるようであった。

<3-C>初日制作補助

ピッコロ劇団公演『かさぶた式部考』初日の公演において、観客の劇場入口でチケットのもぎり、チラシの配布をさせていただいた。そこでお客さんを待つ制作者側は皆、その日観劇予定の団体などを把握し、劇場内がいかほど混雑するかを予想している。その上で、チケットのもぎり、劇場内整備をスムーズに行うことが公演を定刻通りに始められるかどうかを左右するのだということを実感した。

4日目：10月4日（土）

- ・資料室にて、田房さんより事業企画・劇場制作についてのお話<4-A>
- ・劇団公演『かさぶた式部考』2日目制作補助（チケットのもぎり、チラシ配布等）

<4-B>

内容詳細

<4-A>事業企画・劇場制作について

田房さんより、事業企画・劇場制作についてお話をうかがった。その主な仕事の一つである、

自主制作とは別に他の劇団をピッコロシアターに招いて上演してもらおうという作品の買い付けについて、分かりやすく説明していただいた。劇団を招くといっても、美術・音響・照明は劇場によって変えざるをえないので、その調整は難しいことが分かった。

<4-B>2 日目制作補助・観劇

3日目と同じく、開演までのチケットのもぎりやチラシ配りのお手伝いをさせていただいた。この日は団体のお客さんが多かったため、休憩時間がおして、二幕目を始めるのが少し遅くなるだろうという予測のもと、しかしできるだけ定刻通りに始められるように皆努められていた。

その後、公演を観させていただいた。ゲネプロの時は下手側、この回は上手側で観たのだが、二幕目の舞台セットがアシンメトリーな形であるために大分見え方が違った。また、ゲネプロの時と比較すると、次に何が起こるかを知らない観客の緊張感からか、空気が張りつめており、舞台上の演者さんたちの空間がより確立していたように思われる。

まとめ

公共劇場・公共劇団として

ピッコロシアター、ピッコロ劇団は公共劇場であり、公共劇団である。今回、劇場とは維持していくことが大変難しいものであることを知ったわけだが、公共劇場であるピッコロシアターを維持していくには維持費として国から助成金をもらうことが必要となる。そのためには本劇場の存在意義を国に、そして地域の人に示していかなければならない。劇団の公演だけではなく、地域の人に積極的に開放し、実際に使ってもらおうという貸館としての役割がいかにか大切かということが分かった。

また、劇団制作としては子供やファミリーを対象にするなど、地域の人が演劇に触れることのできる機会となる公演を定期的に行っている。公共劇団であるからこそ、民間劇団やプロデュース公演に比べて低価格で作品を提供することができるという一方で、チケットの価格を上げることができないという経済的な制約もある。だが、その中であつても古典作品の制作に取り組むなど演劇作品としての芸術性を高めようと努められているということが分かった。

公共劇団が演劇人を育てるということ

尾西さんはオーストラリアのシドニーでの留学経験についてもお話して下さった。日本では依然として発展途上国だと思われているオーストラリアだが、すでに国が支援する、演劇人を育成する学校があるということに驚かされたという。その出身者が現在、ハリウッドやブロードウェイで活躍する名実共に力をもった演劇人になっているのである。西洋においては古くから国が演劇を価値あるものとして認め、社会の中でそのように位置づけてきた。そして、学校教育として演劇人を育成する仕組みが確立されており、現在に至っている。普通の小学校、中学校で演劇体験をする機会もあまりない日本においては、そもそも演劇を観ることが日常の中であまりないために観客が生まれにくい。また、仮に演劇体験によって演劇が好きにな

り、演劇人を志そうという若者が現れたとしても、欧米のように実践的な演技術と演劇学の両方の側面を学ぶことができるような学校、そして彼らに力量があれば、活躍できることを約束される場や安定した生活が得られる仕組みがない。

それゆえにピッコロ演劇学校と舞台技術学校には今後いかに演劇人を育てていくかという議論において、演劇人を育成するきちんとした仕組みが必要であることを体現する使命があるのではないだろうか。

おわりに

私は将来、演劇に何らかの形で携わりたいと思っているが、そのために何をどうすればいいのか分からなかった。4日間という短い期間ではあったが、演劇作品をあらゆる側面から支える方たちにお話をうかがうことができ、どのような役割を担い、どのような思いで、どのように動くのかといった具体的なことを知ることができ、大変勉強になった。あらゆる面から支える人たちがいて、やっと一つの作品ができるのだということを実感した。それゆえに、劇場スタッフとして実際に作品に携わるという経験をさせていただいたことが嬉しかった。

このような機会を与えてくださった皆様、ありがとうございました。

2.2 兵庫県立尼崎青少年文化創造劇場（ピッコロシアター） インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部演劇学専修 4 回生 川井 秋穂

日程と詳細

10 月 1 日（1 日目）

- ・劇団部の尾西さんより研修概要の説明を受けた後、毎月一日に行われる部門間の業務連絡会議を見学。
- ・業務部長の井上さんより劇場概要の説明を受け、施設を案内して頂く。
- ・制作の貴田さんにお話を伺う。
- ・舞台技術学校主任の中西さんより舞台技術学校の説明を受け、実際に授業を見学させて頂く。

業務連絡会議では、各部門ごとの近況を報告し合い、職員の方全員がチケットの売り上げ状況や今後の発売日、今後の公演予定や演劇・舞台芸術学校の現在の様子など、情報を共有しておられました。

ピッコロシアターは「利用者の意見を元に造られた」劇場で、多くの公共の貸しホールのように、コンサートや演劇、ダンスなど全てに利用できるが特化していない分逆に使いづらい、という問題点を排し演劇専用のホールとして建築され、その過程で、観客側からの視点だけでなく舞台を創る側の視点も多く取り入れられました。また、多くの方が本業の傍らで演劇に取り組んでいる事を考慮し、職員の方のシフトは交代制となっており窓口は常に午後 9 時まで利用申し込み等の受け付けが可能となっています。

3 つの練習室は演劇のみならず、全ての文化活動を行う方を対象に安く貸し出されています。小ホールにはピアノがあり、主にコンサート等に利用され、固定席でなく様々な用途に対応した中ホールは、照明設備や音響、幕なども整っているため、俳優だけでなく裏方まで全てを自分達で補う学生演劇や小劇団の公演に利用される他、大ホールの舞台と同程度の広さがあるため、大ホールで行われる公演のリハーサルにも使用されます。大ホールは、396 席の固定席と、客席の二倍の広さの舞台を持ち、奈落などの舞台機構も全て一通り揃えられています。音響設備は上手側と下手側二か所にあり、それぞれに最新設備が用いられています。本番直前～初日、二日目という日程で劇場にお邪魔させて頂いたため、あまり詳しく裏側を見学出来なかった事は残念でしたが、それでも地下の奈落機構などを見せて頂き、こんな仕掛けになっているのかと感心しました。

貴田さんには、制作の業務内容など色々お伺いしました。演劇制作の裏方というと、大道具や小道具や衣装などの物を造る仕事や、照明や音響などの仕事ばかりが先行して思い浮かびますが、今回のインターンシップを通じて、制作の方の業務内容を貴田さん始め様々な方から詳しくお伺いする事ができ、実際の舞台で観客の目に見える仕事ではないけれども、演劇制作の上で欠かせない『制作』という業務の存在の大きさを実感しました。

ピッコロ舞台技術学校は、1983 年に創設されたピッコロ演劇学校の後を追い、1992 年に創設

されました。これは、バブル期に計画された公共ホール建設が各地で進み、音響や照明、大道具小道具製作といった専門の知識と技術を持つ技術者の奪い合いが始まる事が予感されたためでした。舞台の上の役者だけではなく、その舞台を支える技術者の養成も必要であるとの考えから、ピッコロ舞台技術学校が始まりました。見学させて頂いた授業では、演劇学校と共同で入学から半年の節目に行われる公演に向けて、大道具の図面引きとミニチュアの作成が行われていました。既定の寸法で狂いなく製作されたミニチュアを元に、演出家が道具の配置や大きさなどの調整を行い、更にそれを元に拡大した図面を製作し実際に使う道具を造っていく、非常に手間のかかる根気のいる作業でした。よく、様々な展示会などである公演ゆかりの品が展示されるような時、舞台のミニチュア模型が飾られている事がありますが、一見地味で前を素通りしてしまうようなことも多かったですのですが、あの模型にはこれだけの重要な意味と役割があり、またこれだけの手間をかけて製作されている物なのだと、強く印象に残りました。

10月2日（2日目）

- ・『かさぶた式部考』本番で配布されるチラシの挟みこみ作業を行う。
- ・三砂劇団部長よりお話を伺う。
- ・尾西さんより演劇学校の説明を受け、実際に授業を見学させて頂く。

チラシの挟みこみ作業は、手の空いている職員の方や劇団員の方など総出で行われました。非常に量が多く大変でしたが、面白そうな公演のチラシが沢山ありました。以前は、様々な劇場に赴いても貰ったチラシはあまりよく見ずに処分してしまうことも多かったですのですが、きちんと見れば次に観劇したいと思える舞台に出会えるかもしれないと感じるようになり、最近はこちらとチラシに目を通すようになりました。

三砂さんは以前劇団四季に勤めていらしたという事で、ミュージカルのお話やブロードウェイとハリウッドの関係など、演劇に関わる興味深いお話を色々聞かせて頂きました。尾西さんもオーストラリアの演劇事情のお話などして下さいましたが、やはり諸外国と比べ日本では演劇というジャンルの地位がまだまだ低い事を痛感し、国内はもちろん海外の劇場運営や俳優養成などのシステムについてもきちんと知識を持ち、これからの日本の演劇の更なる発展に繋がっていかねばならないと感じました。

ピッコロ演劇学校は1983年、兵庫県が演劇人・文化人の育成を目的に創設した日本初の公立演劇学校です。必ずしもプロの俳優の育成を目的としているのではなく、演劇を通じて、地域文化の発展に貢献できる人材を育成することに狙いがあります。兵庫県は早くから芸術文化振興に力を入れており、国が演劇人育成に力を入れ始めたのは最近の事であると知りました。劇場に足を運ぼうとする時、人はどうしても劇団のネームバリューであったり、俳優や演目のネームバリュー、実際の評判などを元に行く先を選びがちですが、このような草の根の活動がより広く知られるようになればいいなと感じましたし、私自身、もっとピッコロシアターの公演にも足を運んでみようと思いました。また、尾西さんに出して頂いたなぞなぞは非常に興味深

かったです。演劇人であるためには、周囲の人の気持ちになって動ける事が大切だというお話でした。演劇は総合芸術であると言われますが、キャストだけでなく、関わったスタッフ全員がお互いの事を考え動く事で一つの素晴らしい作品が創りあげられていくのだなと感じました。授業は、半年の節目の公演にむけて練習の真っ最中でした。

10月3日（3日目）

- ・『かさぶた式部考』ゲネプロを見学。
- ・古川副課長より、広報業務についてのお話を伺う。
- ・『かさぶた式部考』公演初日。実際に劇場の受け付けに立ち、制作補助を行う。

公演初日のお昼から、ゲネプロが行われました。最後の通し稽古であり、全てを本番と同じように上演し、各部門の最終チェックが行われます。俳優や音響・照明スタッフ、舞台進行に関わる方達の最終確認であるのは勿論、制作の方にとっても、上演時間の確認や、座席からの見え方の確認、受け付けや場内案内係と示し合わせるべき事項の確認、俳優が客席通路を利用したりすることはないかの確認など、細かな最終チェックが行われる時間です。私達はこの時、下手側の客席で舞台を見せて頂きました。今回は休憩含めて約2時間40分に及ぶ長丁場の公演であり、内容も非常に重いテーマを扱った作品だったため、昨年や一昨年のピッコロ劇団秋公演の明るく楽しい雰囲気と比べると非常に観劇に体力を使いました。ゲネプロ後、疲れた感覚を持ちながら事務所に戻りましたが、俳優やスタッフの方々は休む間もなく調整を続けていたのが印象的でした。

広報業務については、今回の『かさぶた式部考』と、過去の主催公演である『お家さん』を例にお話し頂きました。一口に広報業務と言っても、演目や、出演俳優などによって宣伝の時期も対象も宣伝の仕方も大きく違うのだということを学びました。『お家さん』は関西に実在した巨大商社を舞台にした演目ということで、ビジネスで関わりのある男性が特に足を運び、有名な女優を起用することで女性客や演劇ファンからも注目を集め、新聞などにも沢山取り上げられたそうです。また、公演の半年ほども前から広報に力を入れ、前売り完売に繋がったそうです。また公立劇場の役目として、「演劇の裾野を広げる」ということが挙げられるため、地域の図書館と連携して企画展示なども行ったそうです。演目で普段劇場には無縁の男性を観客として呼び込み、それだけに留まらず、俳優のネームバリューを使い女性客をも取り込むことができたこの演目は、古川さんのお話では「演劇ファンに受けるような作品ではなかったかもしれないけれども、普段劇場に足を運ばない人に演劇に触れてもらうことができた」作品であったそうです。対して今回の『かさぶた式部考』は、内容が重く、役者も無名であり、演目自体もそれほど世間に知られていない作品であるので、短期集中で広報に取り組みされたそうです。注目度が低い事と、10～11月は全国的にも演劇公演が多く、文化欄がすぐ埋まってしまう状態である事も相俟って、新聞で取り上げられることも非常に少なかったそうですが、それでもプレスリリースに更に個別で一筆添えて送るなどしてなんとか取り上げてもらえるように努力さ

れたそうです。また、地元の映画館とも手を組み、『式部物語』の映画観賞会なども行ったそうです。観客が少なくとも、最低限の席数は埋まるよう、新聞の読者プレゼントにチケットをつけたり、公演が終わっても次に繋げていくため、劇評をお願いしたりもなされたそうです。広報は様々な角度から、誰に売っていくのか、どのように売っていくのかを考えなければならぬため、日頃から自分のアンテナを大きく張っておくことが大切だとのお話でした。

『かさぶた式部考』本番初日は、チケットのもぎりとチラシ配布、休憩時間のお手洗い誘導などを行いました。初日は夜 18:30 開演だったため、ピッコロシアター自体が 21 時に閉場ということもあり、いつも以上に時間通りの進行に制作の方が気を遣っておられたのが印象的でした。もぎりの後、チケットの種類別(一般、招待など)整理を行いながら、劇団部の田窪さんより様々なお話を伺いました。阪神淡路大震災の経験を活かし、東北の劇団と提携するなど公立の小劇団ならではの取り組みもお話し頂きました。休憩時間は 10 分という限られた時間だったため、特に女性のお客様のお手洗い誘導に気を遣いました。それと同時に、日本の多くの劇場は、お手洗いのバリアフリーなどは進んできているけれども、女性お手洗いと男性お手洗いの数が一緒であったりそもそも個室の数が少なかったり、お手洗いがニーズに応えた設計になっていないのは問題だなと感じました。後半は実際に客席で舞台を観賞しましたが、この時は上手側の座席に座ったため、ゲネプロの時とは違う視点から舞台を観ることができました。また、観客がいるのといないのとでは、劇場の空気はこんなにも違うものなのかと驚かされました。観客なくして演劇が成り立たないという言葉の意味が理解できた気がしました。終演後、お客様のお見送りとアンケートの回収をし、公演時間を掲示した紙の張り替えなどを行いました。座席の忘れものチェックをしようとしたら、既に俳優・スタッフの方々の間で微調整が始まっており、チェック出来ないまま終わってしまったのが印象的でした。

10月4日(4日目)

- ・田房副課長より、事業計画・制作業務についてお話を伺う。
- ・『かさぶた式部考』公演2回目。引き続き制作補助を行う。

朝 10 時、劇場に伺うと、同じ時間に次々と俳優の方々が 14 時からの公演のために楽屋入りされていきました。

田房さんには、年間の事業計画と制作業務についてお話し頂きました。ピッコロシアターでは、ピッコロ劇団の公演など演劇作品の自主制作を行う場合と、他劇団や団体の公演を買い付け、ピッコロシアターで公演してもらう場合の二種類があり、それぞれに仕事があることをお聞きしました。助成金の申請であったり、俳優やスタッフの決定、営業業務や、買い付け公演であれば相手の団体との細かな擦り合わせ、現地スタッフの調達、関わる人間皆が効率よく動ける為の打ち合わせなど、ありとあらゆる面で物事が万事滞りなく進むように調整し、計画を立てる、制作の業務というのは目立たないけれども非常に重要な役割を果たしていると実感しました。事業計画のため、様々な演劇作品や落語、映画などを鑑賞し、交流をつくり、新聞は

全紙に目を通して常に最新の情報を入手するなど、人知れず沢山の努力が積み重ねられていることを知りました。お話しをお聞きした後、実際に新聞に目を通して演劇関連の話題を切り抜くお手伝いをさせて頂きました。時期柄、宝塚歌劇の話題がやはり目立って多かったのが印象に残りました。

『かさぶた式部考』二日目も、初日と同じ業務を行いました。休日の昼という事もあり、また学生の団体も入っていたため、初日に比べ非常に人が多く慌ただしかったです。もぎりやチラシ配布の合間に、お荷物や、俳優さんへのプレゼントなどをお預かりしたりしました。人は多かったですが、初日と比べると〇時に閉場しなければならない、というような制約がなかったため、制作の方も余裕を持って動いていらっしやいました。3日続けて同じ舞台を観ると、稽古中から千秋楽を迎えるまで、毎日毎日繰り返し、この重い長時間の作品を演じきる俳優の体力や精神力はすごいなと改めて感心しました。また、台詞の抑揚や話し方一つとっても、全く同じものが見られる日は二度とない、舞台は生ものであるということを実感しました。この日の公演は、友市の身体を縛らなければいけない縄が、結びが甘くなってしまったのか首にかかってしまっていたのが印象に残っています。

本来はこの日、舞台裏の詳しい見学と、別役実さんの演劇学校での講義の聴講ができる予定だったのですが、公演期間中であることや台風が接近していることなどあって両方とも予定がなくなってしまったのが少し残念でした。が、尾西さんが舞台裏の見学なら個人的にいつでも、と仰ってくださったので、いつか足を運びたいと思っています。尾西さんだけでなく、職員の皆さん、本当に気さくで親切に接して下さり、沢山のことを教えて頂きました。大変感謝しております。

インターンシップを終えて

今回のインターンシップは、ピッコロシアターやピッコロ劇団の概要、その活動についてのみならず、制作という仕事について、劇場という空間について、また演劇人や技術者の育成についてなど様々な視点から演劇を学ぶ事で、大学で書物に触れているだけでは知ることのできない知識を得、貴重な体験を重ね視野を広げ、日本の演劇界全体に目を向ける大きなきっかけとなりました。観客として舞台を観ているだけでは決して分からない、一つの作品を作り上げる苦勞をこのインターンシップを通じてほんの一部分だけでも知ることができたことは、今後の大学での研究や、進路にも大きな影響をもたらすだろうと思います。

映画を観に映画館に行くことすら、時間がなくて出来ないと嘆く人が周囲に何人も居ますが、そんな中で、貴重な休日を潰しても劇場に行こうと思う人がどれほど居るだろうかとよく考えます。演劇はチケットも高く、映画のようなレイトショーもないので仕事帰りには行きづらく、演目によっては公演時間もかなり長いので、そういったところも演劇人口が少ない一つの原因となっているのではないかと思います。そんな中でもどうにかして観客を呼ぶために、何ができるのか、何をしなければならないのか、今回制作の業務を体験し、お話を色々伺ったことで、そういった問題に取り組むための一つの武器が新しく自分の中に増えたのではないかと感

じます。

常に自分のアンテナを広く大きく張り、世の中の流行や風潮を逃さないことは、特に重要なことだと感じましたし、とりわけこれから劇場を、演劇を支えていくであろう若い世代の観客を増やすためには、新聞やテレビだけではなく SNS も駆使するなど、若い世代の流行に乗っていかねばならないし、その心を捕えるための工夫をもっとせねばならないと感じました。例えば公演チラシも、演劇のことを詳しく知らない若い人に、ぱっと見てこれ何だろう、と手にとろうと思わせるだけのビジュアルやインパクトを持ったものはなかなかありません。地味だったり、暗かったり、文字ばかりだったり、手にとる気も起こらないであろうと思われるようなものが多くあります。どんな層に売っていきたいかで、公演チラシのデザインなどは大きく変わるものではありますが、まだまだ工夫の余地は残っていると感じます。『テニミュ』に代表されるような、漫画を舞台化した作品も数多くあるのに、その観客が本物の演劇に手を伸ばそうとしないのはなぜなのか、まだ努力の足りない部分があるのではないかとそう思います。

演劇人口の少なさだけでなく、費用の問題や、俳優や技術者の養成の問題、東京一極集中の問題など、日本の演劇を巡る課題は山積みではありますが、そういったものに日々直面し、その中で奮闘している方々の生の声を聞き、実際の現場を見ることができて、本当に大きな財産となりました。これからもこの経験を忘れず、演劇について、日本の演劇界について、考え続けていきたいと思えます。

4日間、本当にお世話になりました。有難うございました。

2.3 兵庫県立尼崎青少年文化創造劇場（ピッコロシアター） インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部演劇学専修 3 回生 岡田 尚子

はじめに

今年度、10月1日から4日間、兵庫県立尼崎青少年文化創造劇場ピッコロシアターにて、インターンシップに参加した。演劇学研究室での観劇実習で観劇に行ったり、個人的な芸術活動の際に利用したりしたことのある劇場の内部を知る、たいへん貴重な機会だったと思う。インターンシップのスケジュールとともに、今回劇場で学ばせていただいたことを報告する。

スケジュールおよび報告

10月1日(水)

14:00 に劇場に入り、業務部の尾西副課長より、今回のインターンシップに関して説明していただいた。ピッコロシアターは、県立の劇場として、どのような役割を果たしているのか等、インターンシップに参加した私たちの興味に基づいて、丁寧に教えていただいた。

その後、職員連絡会議という劇場の全職員が参加する定例会議を見学した。「管理部」「業務部」「劇団部」という3つの部署があり、それぞれの報告があった。管理部からは収支やホームページの管理について、業務部からは制作スケジュールや広報、演劇学校についての報告があった。インターンシップを担当するもこの業務部だそう。劇団部からも制作スケジュール等の報告があったが、これはピッコロ劇団のものに限られる。その他、ピッコロの劇団員の活動(地域での演劇指導や外部出演等)の報告があった。

連絡会議の後、井上業務部長より、劇場の概要を説明していただいた。まずは劇場の歴史について。ピッコロシアターは「青少年の自由な創造活動を促進し、あわせて県民文化の高揚をはかる」という目的のもとに設置されたそう。昭和49年に構想委員会が設置され、53年に開館した。兵庫県にはCSR施設というものがあり、これはCulture、Sports、Recreationの頭文字をとったものだという。要するに文化やスポーツを振興させるための施設で、ピッコロシアターはそれに基づいて建てられたものだ。昭和58年には開館5周年記念に、後に述べるピッコロ演劇学校を開校した。当時募集人数は50名であったが、270名以上の応募があったと聞いた。公立の演劇学校がどれほど求められていたかがうかがえる。その後、ピッコロ演劇学校に研究科が設置され、舞台技術学校が開校し、平成6年にはピッコロ劇団が発足した。また、劇場の事業としては、ピッコロ劇団の公演以外に、他劇団の公演、また、地域の人に施設を貸し出す貸館事業を行っている。大中小の3つのホール以外に練習室があり、これは県民でも他県民でも同じ値段で貸出を行っているそう。説明の後、練習室やホールを見せていただくこともできた。

劇団部からは「制作」についてのお話をうかがった。制作の主な仕事は、場所・人・費用の3つに関することだと聞いた。公演をする場所の確保、役者をはじめとする、上演をする上で必要な人員の確保、そしてそれらにかかる費用の確保ということである。さらに、ピッコロシ

アターやピッコロ劇団は、兵庫県立のものであり、商業演劇とは違うため、公的に意義や価値のあるものを作らなければならないという意識があるそうだ。劇団部の貴田部員は、社会に貢献する演劇を目指している、という話をしてくださった。

ピッコロ演劇学校、ピッコロ舞台技術学校の授業は夜からある。演劇学校は火曜と木曜、舞台技術学校は水曜と金曜で、1日目は水曜日だったので、舞台技術学校の見学をさせていただいた。舞台技術学校には美術コース、照明コース、音響コースの3つのコースがある。美術コースのみの見学だったが、受講生がさまざまな年齢、職業の人で驚いた。10月下旬にある演劇学校生との合同発表会に向けて舞台美術の模型を作っているところだった。模型ができると、大道具を作る作業に移行するということだ。非常に細かい作業だったが、私たちが普段観ている芝居にも必要な作業なのだろうと思うと、テキストを読んだり、実際に筋を追って作品を観たりするだけではわからない演劇の面白さがあるのだということに思い至った。

10月2日(木)

14:00 に来館してすぐに、公演の準備作業を手伝わせていただいた。観劇に行くときにもらうパンフレットへのチラシの挟み込み作業である。20種類以上のチラシをすべて人間の手で重ね、挟み込んでいった。時々演奏会の手伝いでしたことがあったが、あまり慣れず、劇場の職員の皆様の流れを止めそうになりながらの仕事となってしまった。開始15分ほどから慣れてきて、すべての作業が終わったのは16:00だった。

小休憩を挟み、再びレクチャーに戻ると、劇団部の三砂部長より演劇構造についてのお話をうかがった。三砂氏は劇団四季に勤めていた経験があるそうだ。ハリウッドとブロードウェイの関係という興味深い論文を紹介していただいた。演劇学では映画を研究する人もミュージカルを研究する人もいるが、その二つが切り離せない関係にあるということがよくわかるお話だった。しかし、ミュージカルその他演劇作品はチケットが高く、学生の身には負担が大きいの、時間の制約もあるので、安価で比較的時間の融通も利く映画のほうが、親しみやすいのではないかと、等の議論になり、三砂部長と私たち3人で演劇の今後について思案したりした。

夜は尾西副課長より、演劇学校と公共劇場と劇団に関するお話をうかがった。日本には、公立の劇団は3つしかない。1つ目が水戸芸術館に付属の劇団 ACM、2つ目がピッコロ劇団、3つ目が静岡県立劇団 SPAC である。ピッコロ劇団は、公立の劇団としては全国二つ目、県立では全国で最初の劇団だそうだ。

先述のとおり、演劇学校は昭和58年に開校された。三学期制で、卒業率は9割以上という。しかし、演劇学校でいくら舞台人を養成しても、実際に演劇を上演する際には、技術スタッフが欠かせない。俳優は育っても、技術スタッフが足りない状況だったこともあり、ピッコロでは舞台技術学校も開校したのだ。

もともと公共施設というのは、地域の人すべてが使いやすいことを目指しているの、講堂や公会堂といった形のものが多かった。しかし、そこでは音響や照明の設備が整っていないので、専用ホールや劇場をつくる流れができたそうだ。それでも、地域住民の意見を取り入れな

から施設をつくれれば、多目的という名の無目的ホールができやすい。ピッコロシアターは、幸いにも演劇に特化した劇場として建てられ、舞台に関わる人を育てるという役割も果たしている。今では、「文化庁劇場・音楽堂活性化事業」のなかで重点劇場の指定を受けているようだ。

劇場の主な仕事は、貸館事業、公演を買って売り出すこと、そして作品を作り出すことである、と尾西副課長はおっしゃった。しかし、多くの劇場では、作品を作り出すことができない。ピッコロ劇団があるため、ピッコロシアターではこれができるのである。

また、ピッコロ劇団員は、固定給をもらっているという話も聞いた。実際、演劇だけで暮らしていける人はほとんどいない。しかし、ピッコロ劇団の役者は創造活動に従事できるように、固定給、ステージ給によって生活をしている。芸術に対する意識の高さがうかがえた。

このようなお話をうかがっていたら、演劇学校の授業の方はほとんど見学できずに終わってしまった。授業終わりに講師の方がおっしゃった、「こだわりを持ってください。でも、そのこだわりを説明しなくていい」という言葉が印象的だった。説明的な台詞や説明的なパフォーマンスは、ほとんどの場合演劇をつまらなくする。

10月3日(金)

13:00 から『かさぶた式部考』のゲネプロがあった。客席には演出、美術などのスタッフや事務職員の方がいるだけだった。客の入っていない状態のものを観るのは初めてだった。上演時間が長いことや、九州の独特の訛りで語られることなどから、慣れない人にはかなり疲れるものなのではないか、という印象を受けた。

ゲネプロのあとは、広報に関するお話をうかがった。広報と宣伝の違いは、客観か主観か、ということだった。広報は作品を客観的に見て、その情報を広く伝えることであり、宣伝は要約すればPRのことである。

今回は、『お家さん』と『かさぶた式部考』の広報スケジュールや実際どれだけの新聞に掲載されたかなどの比較から、広報について詳しくうかがうことができた。『お家さん』は玉岡かおるによる同名の小説をピッコロ劇団が初めて舞台化したもので、のちにテレビドラマともなり、非常に話題性の高い作品であったという。本番の140日前には広報宣伝会議があり、100日前にはチラシが完成していた。一方『かさぶた式部考』については、チラシの完成が80日前であった。スケジュールを並べて比べてみると、その広報活動の差は一目瞭然だった。『お家さん』のチケットは、一か月前には売り切れたということであったし、新聞の切り抜きもたくさん残っていた。

広報を担当している古川副課長は、広報活動をするにあたり、作品をよく理解することを心がけているという。そして、作品への理解を深めた上で、それぞれの新聞社の担当者へ、手紙を添えての売り込みをするようだ。その売り込みの内容は、その地域にゆかりのある出演者であったり、事件であったりするという。そうした工夫により、少しでもたくさんのチケットを売ろうということだった。

この日は、18:30より初日公演であった。17:45から大ホールのロビーで直前打ち合わせを行

った。もぎりとパンフレット配布のお手伝いをさせていただいた。

『かさぶた式部考』は全席指定席で、もぎりの際に座席番号を伝えたり、また、携帯電話の電源を切ることをロビーで伝えたりする工夫をしていた。パンフレットの配布も、お客様が一番受け取りやすいように渡すというのが、簡単なようで難しかった。

上演が開始したら、チケット枚数を種類ごとに数えたりした。一般チケットによる観劇者がほとんどだが、演劇学校や舞台技術学校の生徒、ご招待チケットをお持ちの方などがあるので、それをすべて分けて数えた。このように上演の際にお客様と直接関わる仕事を「表方」と呼ぶそうだ。

休憩時間には、女性のお手洗いをチェックする仕事があった。10分の休憩だが、お手洗いに入っていた人がすべて席に戻ってから開演する。トランシーバを使って裏方との連絡をとっていた。

休憩後、後半から初日公演を観劇した。後ろの席が空いていたので、そこにに入れていただいた。ゲネプロとは違う位置からの観劇だったことや、客が入ったことにより、芝居の印象がずいぶん違ったものになった。盆を使った廻り舞台の上での芝居は、観る位置によってまったく見え方が違う。

終演後、またお手洗いをチェックしに行き、アンケートの回収、客席整理等の仕事をして、この日の仕事は終わりとなった。

10月4日(土)

10:00 に来館し、事業企画や広報のお話をうかがった。これは、ピッコロ劇団の公演ではなく、買って来た公演の企画のほうである。たとえば文学座の公演や寄席をやることがある。すでに来年度の事業計画が出ており、仕事の早さがうかがえる。

その後、劇場の全ての設備を見せていただく予定だったが、担当の方が出張のためできなかった。事業企画のお話をしてくださった田房副課長から、通常業務のお手伝いということで、新聞チェックを頼まれ、昼までその作業をすることになった。新聞チェックでは、実際にピッコロ劇場が載っている記事や、演劇作品に関する記事、あるいは文化活動に従事している方の受賞の記事、訃報などをチェックし、保存しておく作業である。ピッコロシアターではすべての新聞をとっているということで、文化面を中心にさまざまな記事を読んだ。普段は新聞は図書館で時々読む程度なので、じっくり読むと演劇に関することも多く載っていることがわかった。前日、広報のお話をうかがった時に見た『お家さん』と『かさぶた式部考』の新聞記事の切り抜きは、この通常業務のなかで集まったものであるということに気づいた。また、新聞をチェックする作業をしながら、事務所の方と演劇についてのお話ができ、最近は Twitter 等の SNS で演劇の情報を手に入れていると伝えると、宣伝方法についても思案されていた。

午後から公演だった。前日には場内整理を頼まれていたが、宝塚北高校と阪大演劇学研究室の団体が入っていたこと、また、土曜日で客入りが初日よりよかったことなどから、手際よく業務を進めるため、前日と同じくもぎりとパンフレット配布をした。前日よりたくさんの

観客が一度に来たため、チケットの確認で慌ててしまったが、もぎりで落ち着いて対応すれば、そのあとの客の流れも落ち着いたものになるということを教えて頂いてから、仕事がしやすくなった。

この日は上演開始直後から、観劇に入ることができた。ゲネプロとも初日ともまた違う位置であった。一度全部観てから最初に戻ると、話のつながりがよくわかった。

休憩時と終演後は、前日と同じ業務をした。終演後に、客席やロビーにパンフレットが残っていたりすると、長い時間をかけて挟み込んだチラシが置いていかれてしまったのを悲しく思ったりした。

終わってから外に出ると、役者が観客と面会をしていて、役者と観客の距離が近い劇団だと感じた。

本来、この日の夜には、演劇学校で別役実氏の特別講義があり、それを見学してから終了の予定だったが、都合により講義がなくなったため、館長や事務所の皆さんに挨拶をして、すべてのプログラムが終了となった。

まとめ

今までの観劇経験では、私は客としての立場からしか演劇を見ることができなかったが、今回実際に劇場の業務に携わることで、演劇を創るのに必要なことをいろいろ学ばせていただいたように思う。事務所の皆さんが、私たちの興味に基づいて、ピッコロシアターのことに限らず、演劇全般に関するお話もしてくださったので、演劇学という立場以外からの意見等も聞くことができたし、もちろん、公立劇場としてピッコロシアターが果たしている役割についても理解を深められた。地域への貸館事業は公立施設の基本事業ではあるが、やはりピッコロ劇団という県立の劇団の果たしている役割は大きいと感じた。

ほとんどの職員の方に、私たちの興味関心を聞かれ、私はいつも「創作」と答えていたが、すべてのインターンシッププログラムを終えて、「制作」のほうにも興味が沸いてきた。自分の今後の方針を考え直す機会ともなった。演劇に携わるのは、創作する人だけではない、ということ再認識した4日間であった。

インターンシップのプログラムに参加するのは初めての経験であり、もっと厳しいものかと思っていたが、どの職員の方も優しく丁寧に様々なことを教えてくださったので、たいへん充実した学期初めとなった。しかし、まだピッコロシアターの全業務内容がわかったわけでも、制作の概要を完全に理解できたわけでもない。機会があればまたお話をうかがいに、演劇を観にと、何度も足を運びたい劇場となった。